

故・伊藤義教氏転写&翻訳  
ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献  
『デーンカルド』第3巻訳注・その3

青 木 健

序文

本稿は、青木健、「ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーンカルド』第3巻訳注・その2」、『東京大学東洋文化研究所紀要』第147冊，pp.192-141を承けての続編である。故人のお名前を著者に含まれないのが残念であるが、パフラヴィー語のローマ字転写と日本語訳は故・伊藤義教氏に、それ以外の注釈は青木に属する。この間の事情については、『東京大学東洋文化研究所紀要』第146冊所収の「その1」の序文を参照して頂きたい。本号では、『デーンカルド』全420章中の、第27章から第41章をカバーした。

なお、参考文献として、下記のベルシア語著作が新しく出た。ちょうど本稿と同じ『デーンカルド』第3巻の冒頭部分のローマ字転写とベルシア語訳を含み、頗る有益である。

- ・ Feridūn Fazilat [2002]: *Ketāb-e Sevvom-e Dīn Kard (Dars Nāme-ye Dīn-e Mazdā ī: Daftar-e Yekom: 0-112, Tehrān*

第21ページ転写

(27)<sup>(132)</sup> Abar zamānag rang<sup>(133)</sup> ud čē-+ih <ī> rang ud kē-iz [az] +rašt[ān

ī]

pad rang, az nigēz ī Weh-Dēn

<hād> abar [hād] zamānag rang wehīh ud wattarih wehīh [ud] Spe-  
nāg

Mēnōg[īg] xwad-gōhrīhā wattarih Ganāg-Mēnōg pad rasišn ī az

bē gōhr. ud Ōšmurišn ī wehīh ud wattarih sar +kē<sup>(134)</sup>

zamānag padiš +rašt[an] 8, spēnāgīg u <ganāgīg> menišn<sup>(135)</sup> wāyīg ud  
waranīg

ud bayīg ud +gadōgīg [‘:’] +hunihādīg ud dušnihādīg ‘:’

第21ページ翻訳

(27)<sup>(136)</sup> 時間の色と（その）色のなにもなるか、および誰が色

132 Madan 版第21ページの第17行目から。本章には、Menasce[1973: 44-45]のフランス語訳の他に、Zachner[1955: 378-381]の転写と英訳、Fazilat[2002: 109-119, ٤٨-٥٧]の転写とペルシア語訳がある。

133 rang には、(1)colour, (2)religious belief, sect の2つの語義がある。翻訳として、「時間の信仰…」も可能。

134 テキストには MN=az とあるが、MNW=kē に訂正。

135 テキストには az-išān とあるが、訂正。8つ同列で並べるのに、「そして、それら（恩恵霊と破壊霊）から、ワーイとワラン（がある）」では意味が通らない。

136 本章は、ズルヴァーン主義を論じる際にしばしば引用される章である。このズルヴァーン主義とは、時間の神ズルヴァーン（Zurvān）を崇拝する一神教的傾向を持った一派で、Damascius(468-after 533)によって伝えられる Eudemus of Rhodes(4c BC)の記録や、Antiochus 1 of Commagene の碑文、Dio Chrysostom に現れるので、ハカーマニシュ王朝時代の紀元前4世紀の小アジアからシリア、バビロニアで栄えたと見られる。その後、ヘレニズム時代、バルティア時代を通じて

をもって

染めたのか、について。ウェフ・デーンの示教から。

---

イラン帝国西部で勢力を維持したらしく、マーニー直筆の唯一のパフラヴィー語文献 *Šāhbuhragān* でも、ズルヴァーンが最高神の名称として言及されている。また、サーサーン王朝時代にも、Hyppolytus(170-235), Basilius(330-379), Theodore of Mopsuestia(350?-428?), などのギリシア語文献, Eznik of Kolb(5C)のシリア語文献に確認されるほか、ヤズデギルド2世(438-457)の宰相ミフル・ナルセフも、アルメニア再征服の際、現地にズルヴァーン主義を導入しようとした(注166参照)。更に、サーサーン王朝滅亡後も、Mas'ūdi(896-956), Shahrastāni(1076-1153)などのイスラーム学者によって記録されているので、12世紀頃までは命脈を保っていたと思われる。

研究者によって、このズルヴァーン主義をどう捉えるか、見解は甚だしく分かれる。①Frantz Cumont は、ミトラ教のルーツは小アジアのズルヴァーン主義にあると考えた。②Friedrich Spiegel は、イラン文化がバビロニア文化と接触したために派生した、ハカーマニシュ王朝時代のゾロアスター教内部の分派と見なした。③北欧学派の H. S. Nyberg は、ゾロアスター教とは別個に、古代イラン文化から発生した宗教だと考えた。④その弟子 Geo Widengren も、パルティア時代末まではゾロアスター教とは独立した宗教だとした。⑤U. Bianchi は、Spiegel と同じく、ハカーマニシュ王朝時代にギリシア文化とバビロニア文化の影響を受けて成立したゾロアスター教の一派だと考えた。⑥R. Frye は、サーサーン王朝時代の上流階級や宮廷での純粋な思弁の結果だと見なした。⑦Sh. Shaked は、逆に、サーサーン王朝時代の民衆宗教の一形態だと考えた。⑧Mary Boyce は、地域的な区分による説明を試み、正統的二元論はアゼルバイジャンからホラーサーンで栄え、ズルヴァーン主義はペルシア州からメソポタミアで主流だったと考えた。(しかし、これだと、ペルシア州の神官たちが書き残したパフラヴィー語文献の大半が正統的二元論であることの説明ができない。)ズルヴァーン主義に関する1990年までの論争については、Mary Boyce, "Some Further Reflections on Zurvanism," *Iranica Varia: Papers in Honor of Professor Ehsan Yarshater*, Leiden, 1990, pp. 20-29参照。

ゾロアスター教研究上の問題は、上述のように、9世紀までにペルシア州の神官団によって纏められたパフラヴィー語文献に、このズルヴァーン主義の特徴が殆ど

さて、時間の色たる善性と悪性についてであるが、善性は

Spenāg

Mēnōg それ自体が実質となっているもので、悪性は Ganāg Mēnōg が

外部から到来して

実質となっているものである。そして時間がよってもって染められた

善性と悪性の根源 (sar)

の数は8ある。(即ち) 恩恵的と破壊的とのワーイ的とワラン的

及び頒与的と収奪的、(また) 善稟的と悪稟的なるものである。

第22ページ転写

---

(1) +Spēnāgīg ošmurišn mādayān <āsrōnih> dēn dānāgīh ērih

rāstih ud xwābarih [ud] čē-šān ham-tōhmag [ud] rādih

ud rāyēnidārīh ī +abāg<sup>(137)</sup> Weh-Dēn rāst. (2) Ganāgīg ošmurišn

---

見られない点である。仮に、ズルヴァーン主義がサーサーン王朝時代にゾロアスター教内部の大勢力となっていたのなら、パフラヴィー語文献にかなりの痕跡を残した筈である。この問題に対して、二元論的神官たちによってズルヴァーン主義的教義が抹殺されたと仮定し、パフラヴィー語文献の断片の中から拝時教的要素を抽出しようとしたのが R. Zaehner[1955]である。従って、この章も、ズルヴァーン主義の断片と見るか、単に二元論の枠の中で時間について考察したものとするか、見解は分かれる。

137 テキストには čē とあるが、意味は通じない。abāg に訂正して、「ウェフ・デー」と合致する」と解した。Zaehner[1955: 379]のように abar に訂正して、「ウェフ・デーの」も可能。

ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーンカルド』第3巻訳注・その3  
mādayān sātārīh ī āsrōrūh hamēstār, ag-dēnīh

anērīh ud kayakīh<sup>(138)</sup> ud karbih<sup>(139)</sup> ud drōzanīh ud anespāsīh [ud]

čē-šān ham-tōhmag [ud] wišuftārīh padīš. (3) Wāyīg ošmurišn

mādayān artēštārīh āsrōnīh ayār tagīgīh ud arvan<d>īh

ud xwadāyīh ud dād, čē-šān ham-tōhmag hunar ud rāyēnītārīh

abar xwadāyīh. (4) Waranīg ošmurišnī mādayān xwad-dōšagīh

har ahramōyīh ī +āsrōnīh brādarōd, sātārīh ayār,

ud dušdānāgīh ud ag-dēnīh [ud] čē-šān +ham-+tōhmag āhōg

wišuftarihā ī pad-iš. (5) Bayān<īg> ošmurišn wāstaryōšīh ī

gēhān warzīdārīh, čē-šān ham-tōhmag [ud] pad paymānag mānišnīg

handōzišnīg ud wizīdārīhišnīg rādīh ī padīš a<b>zāyēnīdan

---

138 Av. kauui-に由来する MP. Kayak で、反ゾロアスター教的な王侯を指す。但し、同じ Av. kauui-に由来する MP. Kay は、ごく一般的な王侯を指し、特に反ゾロアスター教的な意味を含まない。却って『シャー・ナーメ』では、カイ王朝は親ゾロアスター教的な王朝として描かれている。

139 Av. karapan-に由来する MP. Karb で、反ゾロアスター教的な神官を指す。

āsrōnih artēštārīh ayār. (6) Gadō<g>īg ošmurišn pad

duzīh ud stahmagīh, warzīdārān gēhān petyārēnīdan ī [u] pad

+penīh penēnīdārīh +nanggarīh halag kerdārīh ābādīh <ī> gēhān

petyārēnīdan pad +penīh padēxwīh abesihēnīdan ud dām marjēnīdan,

čē-š<ān> ham-tōhmag wāstaryōšīh [ī] petyār. (7) ud Hunihādīg

ošmurišn hutuxšīh, ān 3 pēšag [ud] ayār pad hutuxšīh

humad hūxt huwaršt ruwān ahlawīh. (8) Dušnihādīg ošmu-

rišn duštuxšāgīh, u pad <duštuxšāgīh> dušmad duš-hūxt duš-huwaršt

第22ページ翻訳

---

(1) 恩恵的と考えられるのは 主として神官職<sup>140</sup>, Dēn 学, 高貴,

公正および仁慈です, なぜなら, これらには 同族たる, ヴェフ・

---

140 āsrōnih は, 祭司と訳されることが多いが, サーサーン王朝時代のゾロアスター教組織を考慮すると, 必ずしも祭儀だけを司る存在ではなく, 行政・司法など帝国の幅広い分野で活躍した。本稿では, 「祭司」よりは意味の広い「神官」の訳語を用いる。

ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーンカルド』第3巻訳注・その3  
デーンと合致する寛裕と統御<sup>かんゆう</sup>があるからである。(2) 破壊的と考えら  
れるのは

主として神官職の敵たる暴君位、邪教信奉、

非エーラーン性、および反ゾロアスター教的支配と反ゾロアスター教的神官  
職、さらに虚偽と忘恩です。

なぜなら、これらには 同族たる、これらによる破壊性があるからです。

(3) ワーイ的<sup>(141)</sup>と考えられるのは

主として、神官職の助力たる戦士職(王侯職)、勇敢と勇猛

ならびに王権と律法です、なぜなら、これらには 同族たる練達を  
王権にもとづく

統御があるからです。(4) ワラン的<sup>(142)</sup>と考えられるのは主として、利己主義、

---

141 この語は、Av. Vaiiu, MP. wāy, NP. bād で、本来は「天と地の間の空気、風」  
が神格化した存在である。『アヴェスター』では Rām Yašt (何故か、Vaiiu Yašt  
とは言わない) がこの神格に捧げられている。(この時期のワユについては、Stig  
Wikander, *Vayu: Texte und Untersuchungen zur indo-iranischen Religionsgeschich-*  
*te*, Teil 1, Uppsala, 1941参照。)ワユは、恩恵と破壊を司る神として戦士階級を  
統括するとされ、その威力はアフラ・マズダーをも凌ぐと考えられた。しかし、善  
と悪の両方の側面を持つ神格であるが故に、ゾロアスター教の二元論の枠に収まり  
きらず、サーサーン王朝時代のゾロアスター教神学では「善なるワーイ (wāy ī  
weh)」と「悪なるワーイ (wāy ī wattar)」に分割して理解されるようになった。  
本章で言及されるワーイは、基本的に「善なるワーイ」の意味で、戦士階級の統括  
者として捉えられている。

142 本来の語義は「欲望」で、転じて「欲望の悪魔」も指す。waranīg でワランの  
眷属、転じて異端も指す。

神官職の仇敵にして暴君位の助力たるすべての破義、

ならびに無知と邪教信奉です、なぜなら、これらには 同族たる、  
それらで破壊する

不徳（āhōg）があるからです。（5）分与的と考えられるのは世を

開拓する農耕職です、なぜなら、それらには 同族たる、分限に  
依拠し

蓄積して（対象を）区別しての寛裕（寄進）があるからで、これは  
よってもって神官職・

戦士職を豊かにする助力です。（6）収奪的と考えられるのは

窃盜と暴行で世の開拓者らに敵対することで、これは

りんしょく  
吝嗇で吝嗇すること、辱かしめること、愚行を演じること、世の繁栄

に敵対すること、吝嗇で繁栄を亡ぼすこと、および創造物を毀  
損することです、

なぜなら、これらには農耕職に敵がいるからです。（7）また善稟的と

考えられるのは 他の3職能階層の助力たる善き勤勉で、善き勤勉に  
よって

善思、善語、善行、魂の天則性があるのです。（8）悪稟的と考えら

れるのは 悪しき勤勉で、悪しき勤勉によって悪思、悪語、悪行



第23ページ転写

---

ud ruwān-druwandih 3 pēšagān petyār. ud ēd ošmurišnān

jud jud az xwēš bun rasišnih az ān ī abar ō ān ī-š

ēr : [weh]weh spēnāgīg ō wāyīg, ud wāyīg ō bayīg,

+bayīg ō hunihādīg : wattar ganagīg ō

waranīg, <waranīg> ō gadō<g>īg, ud gadō<g>īg ō dušnihādīg ud padiš

jud jud<sup>(143)</sup> hān i xwēš ērig ud wēhig +čērīh, u +wattarīg

stahmagih ud čērīh ud stahmagih andar gēhān āmaragānihā ; ud pad-iz

jud jud<sup>(144)</sup> tan wēhig čērīh pad nekīh, ud wattar[ih]īg

stahmagih pad wadīh i āwām ud mardōm, paydāgih : ud az-iz ān <ī> azēr

ō ān ī azabar nērōg ōh paywandihēd čiyōn az mardōm kār pad

huyāzagih ō yazadān ud pad dušyāz<ag>ih ō dēwān nērōg

---

143 この jud jud は, respectively の意味。

144 この jud jud tan は, in their bodies の意味。

paywandišnih,

dēn [pākīh] paydāgīh. Dādār Ohrmazd rašt zamānag pad rang,

pad wehīh čim<sup>(145)</sup> gōhrīhā abzūd<an> ī dahišnān az wehīh, ud padīš

[ud] wānīdan ī ēbgadīg wattarīh ī az +duš bun, ud pad wattarīh

čim ēbgatīg wattarīh ī az bē pad wišōbišn ō dām mad<sup>(146)</sup> az

ēw-kardag nērōgīg apattūgīh ī dām andar [ō] zamānagīhā ī az

bun-dahišn tā frašagird wiškīd-nērōgīhā tarāzēnišnih

ud sārīšnīgīh<sup>(147)</sup> andar pattūgīh u paywandišnih ī dahišn ō

frašagard kē<sup>(148)</sup> zōr ī wehīh ī andar zamānagīhā wattarīh

ānābišnīgīh. ud zamānag ān-iz ī rang ī wattarīh wēš +dārēd,

---

145 この čim は, for the purpose of の意味。

146 Zaehner[1955: 379]は不定詞で matan にしているが、テキストには3人称単数で mad とある。

147 Zaehner[1955: 379]は, ud sārīšnīgīh を纏めて nisārīšnīgīh と転写し, proceeds the restoring と訳している。

148 Menasce[1973: 45]は, +az と訂正している。

ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーンカルド』第3巻訳注・その3  
ān ī wattariḥ frahist az wehīh ī andar im zamānag : pad sazišn

ī-š drang hamāg wānīdāriḥ, ēdōn<sup>(149)</sup> frašagard gāh, pad zōr ī

第23ページ翻訳

および魂の不義性、3職能階層の敵があるのです<sup>(150)</sup>。そして

149 テキストには、'ytwn とある。Zaehner[1955: 379]は +hast, Fazilat[2002: 112] は +ast としている。おそらく、イデオグラムの AYT[wn]と取ったためである。が、そのまま ēdōn で意味は通じる。

150 ここまでの教説は、神官階級 (āsrōniḥ), 戦士階級 (artēštāriḥ), 農耕階級 (wāstaryōših) という、古代イラン社会を構成する3階級を前提にしている。(古代イラン社会の階級制度については、A. Perikhanian, "Iranian Society and Law," *The Cambridge History of Iran*, 3-2, 1983, pp. 632-633参照。)勿論、3階級構造の方がゾロアスター教よりも先にあったのだが、サーサーン王朝時代のゾロアスター教ではこれを以下のように理論化している。

即ち、各階級はゾロアスターの3人の息子に由来すると説かれる。『イラン版ブングダシジョン』TD1: p.202, ll. 10-15には、以下のようにある。「ザルドシュトから、3男3女が生まれた。(長男が) イーサトワースタル (Av. Isaṭ vāstra-, MP. Īsatwāstar), (次男が) ウルワトナル (Av. Uruuataṭ nara-, MP. Urwatatnar), (三男が) ウルチフル (Av. Vouru. čī0ra-, MP. Wuručīhr) である。このようにして、イーサトワースタルは神官階級の指導者でモーベダーン・モーベドとなり、100年間デーンを説いた。ウルワトナルは農民で、地上のジャムカルディーガーンの要塞の指導者となった。ウルチフルは戦士で、ペシュヨータン・イー・ウィシュタースパーンの将軍である。…(3女 Frēn, Srit, Pouručistiの話は省略)…ウルワトナルとウルチフルは妾妻の子で、他は正妻の子である。」(タバリーも同様の伝承を伝えている。Stig Wikander, *Feuerpriester in Kleinasien und Iran*, Lund, 1946, p. 202参照。)明らかに、正妻の子である長男イーサトワースタルに率いられる神官階級が、他の階級の上位に位置づけられている。Av. Isaṭ vāstra- の原義は「牧草地を求める者」で、どう見ても牧畜関係の名称だから、彼を神官階級の指導者に位置づける神学の成立は、かなり後代だと思われる。

これら、教えの対象となるものは  
それぞれ自身の根源から出ており、高きより（それぞれ）己が低き  
に到るのです（即ち）善きものでは 恩恵的なものはワイ的なものに、  
そしてワイ的なものは 分与的なものに、  
分与的なものは善稟的なものに、（また）悪しきものは破壊的なもの  
は  
ワラン的なものに、ワラン的なものは 収奪的なものに、そして収奪的なもの  
は悪稟的なものに（到るの）です。そしてこれによって それ  
ぞれ自身の高貴な善的な勇気と悪的な

暴行があるのです。そして（この）勇気と暴行が世に普遍化し

そして

各人の善的な勇気が美点として、そして悪的

暴行が時代と人との欠点としてあらわれるのです。そして下方から

---

なお、何故、次男と三男で戦士階級と農耕階級の順位が入れ替わっているのか、理由ははっきりしない。しかし、5世紀の大宰相ミフル・ナルセフの場合も、長男 Zurvāndād がヘールベダーン・ヘールベドに、次男 Māh Gušnasp が農耕職の長に、三男 Kardār が戦士職の長に就任したとされているので、この入れ替わりは偶然とは考えられない。

また、各階級には、固有の守護聖火が祀られていた。神官階級の守護聖火はペルシア州のアドゥル・ファッローバイ (Ādur Farrōbay)、戦士階級の守護聖火はアゼルバイジャン州のアドゥル・グシュナスプ (Ādur Gušnasp)、農耕階級の守護聖火はホラーサーン州のアドゥル・ブルゼーンメフル (Ādur Burzēn Mehr) である。このサーサーン王朝時代の3大聖火思想については、青木健、「サーサーン王朝期ゾロアスター教の神官聖火」、『東洋学報』, 87-2, 2005, pp.01-028参照。

より上方に力の結びつくのは このようです、即ち 人類の行動によって、

善き祭儀により神々に、また悪しき祭儀により諸魔に 力が結  
びつくとは

Dēn の明かしであるようなものです。創造主 Ohrmazd が時間を  
色では

善で染めた理由は、諸創造物が実質の面で美から成長し

そして それによって

悪根源より出ている、敵襲的悪を制圧するため（…すること）

である。また悪で（染めた）という

理由は破壊するために創造物に外部から来た敵襲的悪のこと

であるが、（これは）原初の

創造からフラショギルドまでの時間の間では 創造物の合力が耐え

得ないためである (az, l. 15)。(こうして)<sup>(151)</sup>力は分断されても、耐えている

中に復元作用（平衡化）

と始動作用（sārišnīgih）があり、またフラショギルドへの創造物の結び

つきがあり、これら（kē）は時間の間において悪を

制圧する善の力である。そして時間は悪の色の方をより多く有して

いる。

この時間の中における、善よりも多い悪のそれ（色）は経過と共にあり

---

151 分詞構文とみる。

(経過していくものです),

それ(経過)の長さ(12000年)こそ一切(悪)を制圧するものであることは、  
このようなものです、即ちフラッシュギルドの「時」は善の力を

第24ページ転写

---

wehīh, wattarih andar āwānīhā ud zamānagihā hamāg Wānīdārīh : ān

zamānag frašagird pad wehīh abēzag ēstišnīh ; ud padiš Ganāg-Mēnōg

abesihišn, dām wāyišn dahišnīh, tan ī pasēn ud amargīh

+šēdā ī hām dahišn ī weh madan bawēd pad dādār

frazānagīhā handāzišn kām nērōg : (止)

(28) abar xwēšīg ud anōdagīg rang ī Ērān šahr az nigēz ī Weh Dēn

hād xwēšīg rang <ī> Ērānšahr ēr<sup>(152)</sup> ud dād ud Dēn

Māzdēsn ēwēn ud anōdagīg rang čand ēwēnag

<An> ērān xōg ud kēšān

ud ēwēn ī Ērān dēn Māzdēsnān ēwēn petyārag

ud hamē ka

---

152 Menasce[1973: 46]では、この単語が欠落している。Fazilat[2002: 42]では、  
nezhādegīと訳している。

Ērānšahr xwēš [ud] rang ī ast Ērān dād <ud> dēn

Māzdēsnañ

ewēnag dārēd mēnōg ī weh andar mehmān ān ī

wattar aziš

pazdag ud ārāstag ud wirāstag payrāstag ud

pāk hučihr

ud hubōy ud purr-urwāhm čiyōn tan drustih pad

ham +pihan paymānīg

winārišnīgih ud ka anōdag rang ī ast čand sraxtag<sup>(153)</sup>

Anērān

xōg +ud [gand]<sup>(154)</sup> +kēšān ewēn dārēd mēnōg wattar

andar mehmān ān ī

weh aziš pazdag ud <gi>zistag<sup>(155)</sup> ud wišuftag ud +škōh

ud rēman ud gandag

ud duščihr ud purr-+bēš bawēd čiyōn tan wēmārih

pad škefta-

gih ī ham +pihan frehbūd ud abēbūd :’ (止)

(29) abar sāzišnīg rang ī kustagān ī bērōn

---

153 Fazilat[2002: 120, ๐๗]は、sraxtagではなくsrādagと転写して、sarde-hāと訳している。転写には両方の可能性があり得るが、Av. sraxti-との類似性を重視すれば、sraxtagで、NP. sardeとの類似性を重視すればsrādagになる。

154 Fazilat[2002: 120]では、gannāgīgと修正している。

155 本稿では、W<g> zstkと転写し、gを補ってgizistag=「呪われた」との転写・翻訳に至った。Fazilat[2002: 120]では、wcytykと翻字して、wizāstagと転写し、

hād <ān ī> ō-iz kustag hannāmān kē-šan sar Ērān

šahr

sāzišnīg dād dēn ān ham abardar ī Ērān ī Ērān ī-šān

sar

第24ページ翻訳

---

もって、もろもろの時代ともろもろの時における悪を悉く制圧する

ことであり、その

「時」はフラシヨギルドが善を以て清浄に存立することであって、これによって

破壊霊の

亡び、創造物への息吹の付与<sup>(156)</sup>、最終身体およびすべての善き創造物

の不死（と）至福が、創造主の叡智ある御はからい、御意、御力

によって到来することになるのである。

---

āsib-dide=「損害を受けた」と翻訳している。この別解もあり得る。

156 パフラヴィー語原文 dām wāyišn dahišnīh を、Zaehner[1955: 381]は、単に the triumph of creation と訳し、Menasce[1973: 45]も、これを踏襲して triomphe aux créatures と訳している。更に、Fazilat[2002: 5\]は、念の入ったことに āfaridegān pīrūzī <bar badī> = 「〈悪に対する〉創造物の勝利」と補って訳している。しかし、正確には、wāy の原義「風、息吹」を汲んで、「(一旦死んだ) 創造物に、息吹を与えて復活させること」と訳すべきである。文脈の上からもこう訳さないと、前後の「破壊霊の滅亡」や「善なる創造物の不死」と繋がらない。イスラーム神秘主義で言う nafas al-raḥmān = 「慈愛の息吹」とも通じる概念である。



(28) エーラーン国の固有の（色）と外来の色について。

ヴェフ・デーンの示教から。

さて、エーラーン国の固有の色は、高貴なエーラーン性と律法とデーンと

マズダー祭儀の習法で、外来の色は いく種類かの

非エーラーンの性格ともろもろの邪教（ドグマ）

と習法で、これら (i) はエーラーンのマズダー崇拜教の習法の敵である。

そして

エーラーン国が、エーラーンの律法やマズダー崇拜教の習法

である己が色

を保持する限り、つねに、善きメーノグ者が中に止住

しまし、悪しきメーノグ者はそこから

駆逐され、そして（エーラーン国は）整復されて陶冶され、装飾

されて清浄美麗

にして芳香があり かつ 歓喜に満ちること、あたかも身体の

健全さが食物は同じでも適度に

調節することに存するようなものである。しかし、エーラーン国が幾種類かの

非エーラーンの

性格ともろもろのドグマと習法を保持するかぎり、悪しきメーノ

グ者が中に止住<sup>しじゅう</sup>し、善きそれ（メーノグ者）

はそこから駆逐され、そして（エーラーン国は）呪<sup>びんらん</sup>われて紊乱し、

そして貧窮して不浄かつ悪臭があり、

また 醜悪にして苦痛に満ちるものとなること、あたかも

身体の病気が食物は同じでも過多や（欠如）

という異状さに存するようなものである。

(29) エーラーン国外の諸地域の認めらるべき

色について。ウェフ・デーンの示教から。

さて、エーラーン国を盟主／宗主国とする諸地域・諸支国に認めらる

べき 律法と宗教 (dēn) は、宗主国たるエーラーンの同じ最高  
の

第25ページ転写

---

dād dēn : u-š az abar rasišnīh <ī> ham dād

dēn wehīh ud

sūd [zūn] abzōn čiyōn-šān mad az dād ī Ērān

pad xwad-

āyīh awēšān Ērān kē 7 kišwar ud kē-iz Xwanirah

xwadāy [ī awēšān Ērān] būd hēnd az Hōšāng ud

+Taxmō-

rab ud Ĵam ud Frēdōn ud any-iz Ēr ī ō awēšān ōz

ī-šān

xwadāyīh mad ēstēd wuzurg bōzišn frāxīh rāyēni-

šn fragān

ī-šān sūd ī aziš paywastag kē-iz abārig xwadāyān

<ī>

Ērān hamē ka awēšān +dādestān padīriftan drust

dahibed

dāštan nē pad stahmagih ēmēdih druxtār ud andar

kōš zadār

ud ōzadār ud raftār būd hēnd akōxšišn ī awiš

ud dād bandag<sup>(157)</sup> [ud] čē-šān dāšt[an] padīš abzāyēni-

d[an] ud az dēn

ān ī pad rawāgih ānōh-iz pad dēn Māzdēsn ōz

ud warz ud xwarrah

bē burd andar<sup>(158)</sup> ī az-iz awēšān ēbgat [ud]

+winnārišnih čē-šān

sūd ud rāmišn paydāg ān ī-šān az<sup>(159)</sup> kēš awiš

ōbast

ud padīš škarwid ēstēnd abāz waštaḡih didāriḡ-

iz čiyōn

kēš ī Yašu ī az [w] Hrōm ud ān Mašā<sup>(160)</sup> az-iz Xaza-

rān ān ī Mānēh

az-iz Turkestān tagīḡih ud čērih ī-šān pēš būd

---

157 テキストには、bndk とあるので、bandag と転写して、「(律法の) 僕」と訳した。Fazilat[2002: 123, ๕๔]では、bowandag と転写して、dād-gostari と訳している。

158 Fazilat[2002: 124]には欠落。

159 Menasce[1973: 47]では、kēと修正している。

160 テキストには、mš' とある。これを忠実に転写するとしたら、Mašā だが、語義は不明である。ハザル族の間で広まった宗教の創始者で、その宗教はゾロアスター教神官の目から見てキリスト教、マーニー教と並ぶ邪教とされるのだから、ユダヤ教の預言者モーゼが予想される。

bē

burd ud ō wadagīh ud ōbastīh andar [amārān]

hamahlān<sup>(161)</sup> abgand

ud ān ī +Mānē az [w] Hrōm +filoso[k]fāyīh-iz

ānāft[an] ∴ (止)

(30) abar frāzīh <ud abāzīh> ī pad bahr dahišnīh<sup>(162)</sup>

ēwēnagān

az nigēz ī Weh-Dēn

---

161 テキストには、hm'h'l'n とある。これを忠実に転写するとしたら、hamahlān = 「仲間たち」である。この場合、「キリスト教、ユダヤ教、マーニー教が、小アジア、ハザル国、中央アジアで繁栄したので、そこの住民の仲間の中で、それらへの改宗者の立場は下落した」との文意になる。しかし、Menasce[1973: 47]は、この単語を Himyarān = 「ヒムヤル人たち」と修正している。この場合、「キリスト教、ユダヤ教、マーニー教は、小アジア、ハザル国、中央アジアで繁栄し、更に南アラビアのヒムヤル人の間でも害悪をもたらした」との文意になる。このヒムヤル王国は、南アラビアに成立した国家で、4世紀半ばに国王がキリスト教に改宗したものの、ユダヤ教の勢力も強かった。575年には、ホスロー1世によってサーサーン王朝に併合されている。従って、サーサーン王朝のゾロアスター教神官の目には邪教の巣窟に見えたに違いなく、更に、イランから見て邪教国家を西北東南（小アジア、ハザル国、中央アジア、南アラビア）の順で挙げたと解釈できるから、ムナスの解釈にもかなり合理性がある。

162 テキストには、dhšnyh とある。Menasce[1973: 47]は、dāšn と転写し、la participation と訳しており、Fazilat[2002: 128, ๑V]も、dāšnīh と転写し、dāštan = 「所有すること」と訳している。dahišnīh = 「付与すること」と、両方の解釈が可能。文意を考えても、「天分を所有すること」と「天分を付与すること」のどちらでも筋が通る。本稿では、宗教的なニュアンスを含めて、人間が自分で天分を所有するよりは、アフラ・マズダーから付与されると取った。

第25ページ翻訳

---

律法と宗教である。そして この律法と宗教がそれ（諸  
地域）に到来することから 幸いと  
利が増大することは、例えばエーラーンの律法から支  
配権（王権）とともに それらが到来  
したごときである。7洲の、そしてまた（第7洲たる）クワニラフ（洲）  
の主でもあった彼等エーラーン人（たち） — ホーシャングや  
タクモー  
ラブやジャムやフレードンやその他のエーラーン人を経て  
その彼等（エーラーン人ら）に力 即ち彼等の  
宗主権（支配権）が到来してきたのである — 大きい救済、繁栄、統  
御の基盤にして  
彼等の利益の源泉たるものが結びついて、です。（ですから）エーラーンの  
（傘下にある）他の小王たちたるものども  
も、彼等（自身）が（エーラーンの）法を受け入れ 正統の  
国主（大王）を  
支持するかぎり、常に、彼等は、暴行に望みをかけての欺瞞者と  
なり、また殺傷しつつ打倒者  
や殺害者や進撃者となったことはなく、それ（dādestān 「法」）に  
争わず  
して律法のしもべとなったのである。なぜなら、彼等は（それを）奉じ  
それによって（法を）栄えさせ、そして dēn から  
そこにも 蔓延していた それ（邪教的デーナ）を、マズダー祭儀教の力

と威力と光輪によって、彼等  
仇敵（ども）からくる統御の中にあり乍ら、除去した  
からで、それというのも、彼等に  
利と平安があらわれたのである。（しかし、）ドグマ（kēš）から彼等に  
降りかかり  
そして それによって（彼等が）つまづいていたものたちの回心が見  
えるようになるからで、<sup>(163)</sup> それは例えば  
イエスのドグマは小アジアから、モーセのそれはハザル国<sup>(164)</sup>  
から、マーニーのそれは  
トゥルケスタンから、彼等がもと有していた勇気と勇猛が  
除  
去されて 仲間ども<sup>(165)</sup>の中では下劣と  
転落の立場に投じられ  
そして マーニーのそれ（ドグマ）は小アジアから哲学も（それを）  
制圧した、ごとくである<sup>(166)</sup>。

---

163 この文章は二重主語と取った。

164 679年から11世紀まで、南ロシアからコーカサスを勢力範囲としたテュルク系の王朝。しかし、ユダヤ教に改宗したのは9世紀なので、本章成立はそれ以降と考えられる。

165 ヒムヤル王国との訳も可能。注161参照。

166 本章の主張では、世界の7州はゾロアスター教を受け入れていたものの、小アジア、南ロシア、中央アジア、南アラビアなどが、キリスト教、ユダヤ教、マーニー教に転宗していったことになっている。確かに、小アジアでは、ハカーマニシュ王朝時代にズルヴァーン主義的が栄えていた証拠がある。（注136参照）アルメニアも、メディアによる征服からサーサーン王朝の崩壊まで、一貫してイラン系民族の文化的影響下にあり、4世紀にアルシャク家の血統の王家がキリスト教に改宗するまでは、ゾロアスター教の垂流が支配的だった。（James R. Russell, *Zoroastrianism in Armenia*, Harvard University Press, 1987参照。）また、中央アジアにも、地方的

(30) 天分の賦与における優先と劣後の

諸種類について。

ウェフ・デーンの示教から。

さて、これら一般人の天分 (bahr) 賦与における優先と

第26ページ転写

---

dahišn<sup>(167)</sup> ī ēn amaragānīhā fradom hunarāwand

mehtar ud abāz

az ōy dudīgar hunarāwand juwān frāzih ī hunar-

ōmand mehtar +abar

hunarāwand +juwān +čim amaragānīhā mehtar

abāg hunarāwandih uzmūdag-

hunarih ud ōstīgānīh ī padiš [padiš] wēš ud wānēd

padiš

wattarih-iz ān ī juwān abāg-iz hunarāwandih

---

なゾロアスター教（サーサーン王朝の国家宗教となったゾロアスター教から見て）が流布していた。（R. Foltz, “When was Central Asia Zoroastrian ?,” *Mankind Quarterly*, 38/3, pp. 189-200参照。）更に、アラビア半島にも、サーサーン王朝の政治支配の影響が強く及んでおり（部勇造, 「文献資料に見る東南アラビア(2)」, 『金沢大学考古学紀要』, 第25号, 2000年, pp. 19-31参照）, シェマーム銀山, サヌアーの銀山などにゾロアスター教徒が多数移住し, 前者には拝火神殿もあったと伝えられている。（家島彦一, 『イスラム世界の成立と国際商業』, 岩波書店, 1991年, pp. 71-72参照。）しかし, ヤズデギルド2世によるアルメニアへのゾロアスター教再導入が失敗に終わったように, 4世紀以降はキリスト教に押され気味で, 宣教活動は概して振るわなかった。

ō ān ī bowandagih ī  
hunarāwand ī pad dād-mehih bawēd nē mad  
ēstēd abāz az  
ōy sidīgar ahunar jūwān abāz az ōy abdom  
ahunar zarmān ud  
frēzih ī ahunar jūwān abar ahunar [ahunar]  
zarmān čim frahistihā  
ēmēd-wārih ī ahunar jūwān pad madan ī ō  
hunarōmandih az hanja-  
ftagih ī-š zōr ī hammōg ∴ (止)

(31) abar frārōn tuxšāgān bawēnd hunsand ud  
abārōn  
tuxšāg<ān> ahunsand az nigēz ī Weh-Dēn

hād kē<sup>(168)</sup> dādihā tuxšāg tuxšišn <ī> abar +awizirišnīg

xīr pad ayābišn ud pad-iz anayābišnīh [ī] abespārišn

ō spās <ud>

rāmišn frārōn +tuxšāg<sup>(169)</sup> hunsand ud kē<sup>(170)</sup> tuxšišn ī

---

167 注162参照。

168 ほぼ文頭に kē が出ている珍しい構文。先行詞がないので、whoever = 「人にして」ととった。

169 kē の先行詞は、意味の上からは、この frārōn tuxšāg = 「順義的努力者」であるべき。先行詞が文中に含まれていると考えると、特異な構文である。

170 注168参照。同様の構文である。



abar  
wizīrišnīg xīr pad ayābišn ud pad-iz anayābišnīh  
abespārišn  
ō garzišn <ud> bēš abārōn tuxšāg<sup>(171)</sup> ahunsand bawēd  
awiz-  
īrišnīg paymān ī tan dārišn<ig ud> gyān dārišnīg  
+zēnāwand az  
frārōn<ih> wizīrišn [ī] ān freh az ān ōh-iz<sup>(172)</sup> ī az  
abārōnīh  
ruwān bōzišn hammiš čē kirbag wizīrišnīg  
hamāg [ī] wināh ˙˙ (止)

第26ページ翻訳

---

劣後の諸種類のうちで、筆頭は熟達した  
年長者であり、またこの者  
におくれて二番目は熟達した若年者である。熟達した  
年長者が熟達した若年者  
に優先する理由は、一般的に年長者は  
熟達していた経験をつんだ  
才幹とそれへの信頼とがきわめて多く、そしてそれを以て  
悪をも  
制圧することである。(これに対し) 若年者のほうは熟達していても、  
年令が長じるにつれて生じる (bawēd)

---

171 注169参照。同様の構文である。

172 Menasce[1973: 48]では訳していない。

熟達の完成度には（まだ）達してはいない

のである。この者に

おくれて三番日は才幹なき若年者である。この者におくれて最後尾

は才幹なき老人である。そして

才幹なき若年者が才幹なき老人に

優先する理由は、殆どの場合、

才幹なき若年者は、学習力を尽くせば、

熟達の域に達する

（ことに）希望がもてるということにある。

(31) 順義的な努力者たちは満足者となるが、

反義的

努力者たちは不満足者になることについて。ウェフ・デーンの示

教から。

さて、（人にして）法に従って努力しつつ、不可欠の物を求めての

努力があり、得たときも得ないときも

感謝と

歓喜への帰服がある、順義的努力は満足者となるが、

必要でない物を

求めての努力があり、得たときも得ないときも、

不平と苦痛

への帰服がある、反義的努力は不満足者となる。

不可

欠なのは順義から肉体を活々と保ち且つ

生靈を活々と保つ

paymān であり、不可欠でないのは それよりも多くのこと — これは  
まさに反義から由来するもの、ということである — である。  
善行たるものはすべて靈の救済となり、不可欠でないのは  
すべての<sup>さいごう</sup>罪業である。

第27ページ転写

(32) abar pānagīh <ud> hilīh<sup>(173)</sup> az pānagīh

az nigēz ī Weh-Dēn

hād az yazadān +amaragānīg ud <n>āmčīštīg pāna-

gīh ān ī pad

pahrēz ī wināhīh [ī] ud kirbaggarīh yazadān xwēš

čiyōn weh

abar weh ud hilīh<sup>(174)</sup> az pānagīh ān ī pad wināhgārih

apetīt wināhīh ud kirbag dušmenīh az yazadān

xwēšīh +nēst<sup>(175)</sup>

173 テキストには ŠBKWN-X2とあり、X2の部分の解釈が分かれる。Menasce[1973: 48]と Fazilat[2002: 131, 〇人]は、hilēnd と転写して、それぞれ cessation, bar gereftan = 「運び去ること」と訳している。名詞として訳したいのは分かるのだが、転写はどう見ても動詞である。そこで、本稿では、かなり強引とは思いますが、初めから X2を-ih にして、hilīh と転写した。

174 注173参照。同様の事態が起こっている。

175 テキストには lhwyt とあり、LA-st と解して nēst と転写した。しかし、かなり苦しい。この場合、文意は、「(追放は) 神々自身に由来するのではない」となる。

nūn ēd-iz rāy hamē wehān ēmēd ud wattarān

bīm dāštan

čimīg tā andar gumēzagīh pad meh-dādestānīh<sup>(176)</sup>

ī ēmēd hām-dahišn

gētīgīhā wattar-iz ast ī pānagīh ud weh-iz ast

ī

hilih<sup>(177)</sup> az pānagīh [ud] ēg-iz mēnēgīhā ōy weh

bōzišn <ud>

burzišn rāy nēk [ud] frazāmīh<sup>(178)</sup> <ud> ōy wattar škar-

wišn ud nigūnīh

rāy wad frazāmīh madan paydāg 𐭠𐭣𐭥𐭥<sup>(179)</sup> <rāst bē ka> <sup>(180)</sup>

dānēd kū garān wizend

---

Menasce[1973: 48]は、rānit と転写して、on s'écarte と訳している。しかし、rānit という動詞は、管見の及ぶ限り在証されない。この場合、文意は、「(人間は) 神々から遠ざかる」となる。Fazilat[2002: 131-32]では、LHW <HL-yt> -yt と修正して abāzihēd と転写し、dūr az=「～から遠い」と訳している。この場合、文意は、ムナスと変わらない。

176 注9 (『東洋文化研究所紀要』第146冊所載) 参照。

177 注173参照。同様の事態が起こっている。

178 個人としての終末の意味。世界全体の終末=Frašagird とは区別が必要。

179 Fazilat[2002: 131-33]は、ここに、以下の文章を挿入している。ud kešdārān kē wehān hīlend az pānagīh ud wattarān pānagīh kēš ī-šān abar yazd adādestānīh guft-bawēd yazdīh aziš bē guft-bawēd abar sūd ī az rāst guftārīh ud stāyišnīh ī padīš ud zyān ī az drō-guftārīh ud astāyišnīh ī aziš az nigēz ī weh dēn hād ud rāst guftār bē ka

しかし、テキストには存在しない文章で、どのような出典によるのかも不明。残念なことに、注記もない。

180 1行下の drō bē ka=「虚言者は、以下のように」とパラレル・パッセージになる筈なので、復元。ここは「正語者」が主語でない、全体の文意が通らない。

ud zyān ī ahlawān aziš tā hamē guftan ˙˙ ud drō

bē

ka dānēd kū wuzurg bōzišn ud sūd ī ahlamān

aziš tā

hamē hagriz nē guftan Weh-Dēn handarz rāst

guftār

ka<-iz>-iš ān ī rāst guftārīh <andar> anāgāhīh ī

aziš dahišnīg<sup>(181)</sup>

ō zyān ī ahlawān zāmihēd padiš abun-dāšt <ud>

pad

rāstīh guftārīh stāyišnīg ud drō guftār agar-iz-

aš ān

drō guftārīh andar anāgāhīh aziš dahišnīg<sup>(182)</sup> ō sūd ī

ahlawān rasēh padiš a-spās ud pad drō guftār-

īh

astāyišnīg hē ˙˙ (止)<sup>(183)</sup> (33) abar abāz az wināh ud

frāz ō kirbag <ud>

abāz az kirbag frāz ō

---

181 テキストには、dhšnyk とある。素直に読めば、dahišnīg と転写して、「与える、創る、発する」と翻訳することになる。この場合、文意は、「正しく語る者は、たとえ知らないままに彼から発した正しい言葉が…」となる。しかし、Fazilat[2002: 133, \. ]は、dānišnīg=知識と修正している。敢えて無理に修正しなくても、文意は通じる。

182 注181参照。同様の事態が起こっている。

183 この部分は改行がなく、文末に次章のタイトルが含まれている。

第27ページ翻訳

---

(32) 庇護と庇護からの追放について。

ウェフ・デーンの示教から。

さて、神々による一般的な、そしてまた特殊な庇護

のうちで、造罪

の回避と造善となるようにとのそれ（庇護）が神々自身であるのは

例えば善きものは

善きものの上にあるようなものである。そして庇護からの追放は

罪悪を犯し

罪悪を懺悔せずして善行<sup>(184)</sup>に敵意を抱くがためのそれ（追放）で 神々

自身から出ているものではない。

今やこのような次第であるから、つねに、善人どもは希望を、

そして悪人は恐怖をもつことが

---

184 kirbag は、サーサーン王朝時代のゾロアスター教に於ける「善行」の概念を示すキーワードであるが、対応するアヴェスター語は知られていない。「善行」の具体的内容としては、例えば『メーノグ・イー・フラド』第4章には、善の希求、宗教的祭式の実行、最近親婚（父娘・母息子・兄妹・姉弟間での結婚）の実践、隊商の供応、全ての者への幸運の祈りなどが挙げられている。他にも、悪に分類される生物（蛙、蜥蜴、蠍など）の殺害、ダストワルの指導の下での祭祀の執行などがある。これらの現世での善行の結果は、来世を保証するとされる。パフラヴィー語文献に於ける kirbag の用法については、K. M. JaspasAsa, "Aspects of kirpak in Zoroastrian Religious Texts," *Mémorial Jean de Menasce*, édité par Ph. Gignoux et A. Tafazzoli, Leuven, 1974, pp. 237-259参照。

大切なのである、混合界では 全創造物が希望をもつように

との恩赦によって、

ゲーティグ的には悪人にも庇護があり また善人にも

庇護からの

追放があることもあるものの (tā, l.8), それでも (ēg-iz), メーノー

グ的には善きものに救いと

称賛があるので (rāy) よき終末が、そして悪しきものに蹉

跌と顛落<sup>てんらく</sup>がある

ので悪しき終末が到来することは明らかである。〈正語者は、〉<sup>(185)</sup>

義者たちの重い災厄

や禍害が彼（正語者）から出ていることを知っている時でも

常に言うが、虚言者は

義者たちの大きい救いと利が彼（虚言者）から出ていることを知

っている時のほかは 決して常

に言わない、とはウェフ・デーンの教訓（ハンダルズ）である。正

語者は、

たとい知らずして彼自身から

発したその正語が

義者たちの禍害になる (zāmihēd) 時でも、そのことについて (padiš)

彼は原因をなすものでなくて (abun-dāšt)

正語の故に称賛さるべきである。然るに虚言者は、たとい

彼が

知らずして彼自身から

発したその虚言が義者たちの

---

185 注180参照。

利になっても (rasēh), そのことについて彼は感謝されるものでなく (aspās) て 虚言の故に  
称賛されざるものであろう。(33) 罪惡から退き善行に進む(人)と  
善行から退き罪惡

第28ページ転写

---

wināh kas az nigēz ī Weh Dēn

hād kē-š Wahman mehmān abar axw ud axw xwadāy  
abar  
kām ud āštīh kadag +ud +nišēm<sup>(186)</sup> <ī> menišn rāstīh mēnōg  
mānag ī  
gōwišn xrad dastwar <ī> kunišn abāz az wināh frāz  
ō kirbag  
kē-š Akōman andarag axw menišn +pīm<sup>(187)</sup> ud waran  
pādixšāy  
abar kām ud xēšm kadag ud <ni>šēm ī menišn drōza-  
nīh mēnōg abar-  
framādār abar gōwišn [ī] xwad dōšagīh dastwar ī  
kunišn abāz

---

186 テキストには, npšmn とある。この単語は在証しないので, Menasce[1973: 49], Fazilat[2002: 135]とも, 同様に修正している。

187 テキストには, p'ym とある。本稿では, pīm と修正して, 「心を苦しめ」と訳した。Menasce[1973: 49]は, pažm と修正して, la tristesse と訳し, Fazilat[2002: 135]もこれを踏襲して, pažm と修正した上で, dard, ranj と訳している。



az kirbag frāz ō wināh bawēd ˙: (止)

(34) abar yazadān kāmāgīh ī weh ud dēwān

kāmāgīh <ī>

agdēnīh ēwēn +az nigēz ī Weh-Dēn

hād Weh-Dēn ēwēn handāzišn<sup>(188)</sup> ī passand ō

dād<sup>(189)</sup> ēn-iz

ān ī pad xwadīh hučīhr ka-iz pad waštanīg<sup>(190)</sup>

kard<sup>(191)</sup>

duščīhr ān ī pad xwadīh hučīhr ka-iz pad waš-

tanīg<sup>(192)</sup>

kard duščīhr kirbag ast kirbag yazadān kām

ud agdēn ēwēn

handāzišn ī dād ō passand [ud handāzišn ī

dād ō passand]<sup>(193)</sup>

---

188 テキストには、hnd'zšn とある。Fazilat[2002: 137]は、hadāzišn と転写して、andāzišn と訳している。これは、誤植ではなからうか？

189 yazad と読む可能性もある。パフラヴィー文字では、d't と yzdt は同じ綴りになる。この場合、「嗜好を神に適合させる」との訳文になる。

190 テキストには、wštnyk とある。素直に読めば、waštanīg と転写して、「変化作用」と訳せる。しかし、Menasce[1973: 49]は、vistānak と転写して une altération と訳している。更に、Fazilat[2002: 139-40]は、waštisg と転写して、jā be jā = 「置き換え」と訳している。

191 grift と読む可能性もある。イデオグラムにした場合、OHDWN-t=grift と OBYDWN-t=kard は、同じ綴りになる。

192 注190参照。

193 コピーストのミスと思われる部分。

ēn-iz ān ī pad xwadīh duščihr ka<-iz> pad

<wa>štanīg<sup>(194)</sup> kard

hučihr [ī] ān ī pad <xwadīh> duščihr ka-iz pad

waštanīg<sup>(195)</sup> kard[an]

hučihr bazag ast bazag dēwān kām ˙: (止)

(35) abar fradom āwurdār ī Weh-Dēn

hād čiyōn dām<sup>(196)</sup> az dēn awizirišnīgīh<sup>(197)</sup> ud az dādār

padiš ābādīh<sup>(198)</sup> ud Dēn<sup>(199)</sup> gumēzagīh āwāmīhā <ud>

zamānihā hamē ō

nōg ud abāz madārīh niyāz padiš paydāgīg

ān fradom dēn

第28ページ翻訳

---

に進むに人について。ウエフ・デーンの示教から。

---

194 注190参照。

195 注190参照。

196 二重主語ととった。

197 注196参照。

198 注196参照。

199 テキストには andar とあるが、この一文には主語が欠けているので、パフラヴィー文字の上ではかなり似ている Dēn に修正した。andar のままなら、dām = 「創造物」を主語にとって、「創造物は…そのもとに現れる」とするか、Fazilat[2002: 13]のように、aknūn, zamāne hangāme-ye āmikhtegī ast = 「今や…の時代である。」と訳すしかない。しかし、デーンを主語にすれば、表記のように直裁に意味が通る。

さて、ワフマンがその（人の）生气（axw）に宿り、そして生气が意

欲に君臨し、そして平和が心の館や座となり、正義の霊（メーノーグ）が語の

家、知慧が行為の指南者となるものは、罪惡から退き善行に進むが

アコーマンがその（人の）生气の中において心を苦しめ またワラン（貧婪）が意欲に

君臨し そして忿怒が心の館と座となり、虚偽の霊（メーノーグ）が語に

司令し 利己主義（利己心）が行為の

指南者（ダストワル）となるものは善行から退き 罪惡に進むのである。

(34) 神々がよき習法を欲し給うも諸魔

は邪教の

習法を欲するということについて。ウェフ・デーンの示教から。

さて、ウェフ・デーンの習法は 嗜好を法に適合させることである。これこそ

たとい 変化作用によって 醜惡にされても、自性において

美麗なものである。たとい変化作用によって醜惡にされても自性において

美麗なものは善行であり、善行は神々の欲し給うところである。

また 邪教の習法は

法を嗜好に適合させることである。[

]

これこそ、たとい変化作用によって 美麗にされても、

自性において醜悪なもの

である。たとい変化作用によって 美麗にされても

自性において

醜悪なものは悪行であり、悪行は諸魔の欲するところである<sup>(200)</sup>。

(35)<sup>(201)</sup> 善教の最初の将来者について。

---

200 本章の趣旨は、例え「変化作用」によって変わろうとも、「自性」において美麗なものは美麗であるし、醜悪なものは醜悪であるという、一種の決定論である。本来のゾロアスター教は、善と悪の間での選択を重視する自由意志の宗教だった筈で（ヤスナ第31章参照）、パフラヴィー語文献 *Škand Gumānīg Wizār* 第10章第70-71節でも、「アードゥルバーディー・マーラスパンダーンの溶鋳試練が、運命論者（*abasyastagān*）とも呼ばれる彼ら最悪の破義者どもから、デーンを救ったのである。」と記述されている。（日本語訳は、伊藤[2001: 367]参照）それにも拘わらず、折に触れて表面化するこのような決定論的世界観は、ゾロアスター教正統派以外の、ズルヴァーン主義の影響かとも推測されているが、はっきりしない。

201 本章は、ゾロアスター教の預言者論を検討する際によく引用される章である。モレによれば、本章には、人類史に於いてゾロアスターが果たす独自の役割への言及がなく、ゾロアスター教の預言者イメージとイスラームのプロブレマティークが混合して形成された章である。Molé[1968: 522-523]参照。確かに、こう並べられてその中間にゾロアスターが配置されていると、「立法者」でも「神の一人子」でも「預言者の封印」でもなく、独自性が薄まっている感がある。しかし、注釈者には、必ずしもイスラームの影響が明確であるとは思えない。後述するように、ゾロアスター教の中での預言者職に関する多様な名称を整理して、ゾロアスター教の預言者論を明らかにする方が先決ではなからうか？（注203参照）

なお、モレがいう「人類史に於けるゾロアスターの独自性」とは、「ガヨーマル

さて、創造物はデーンから不可欠性が生じ、また創造主  
から  
それによって繁栄が生じるように、デーンは混合の諸時代  
や諸時期につねに  
新しく或いは 再び到来する必要に応じてそれ（創造物）の  
もとにあらわれるものである。創造主からの最初の

第29ページ転写

---

padiriftār ī az dādār Gayōmart ī mardōm bun  
fradom gil  
šāh<sup>(202)</sup> būd pad kunišn ī dēn ō gēhān winārišn  
ud wirāyišn  
rawāgih <ī> dēn abdom dēn āwurdār ī az dādār  
Sō[k]šāns ī  
abdom mardōm sar ud xwadāy bawēd kē pad  
dādār kām ud  
warz ō frazām burdārih ī dēn ān ī pad Ga-  
yō[k]mart kunišn

---

ト以下の宗教を待望する先行者」と、「ウシェーダル、ウシェーダルマーフ、ソー  
シャーンズという宗教を完成させる後継者」の間に立ち、人類史の中間を占める  
「完全人間」のこと。Molé[1968: 511-525]参照。

202 テキストには、TYN MLKA とイデオグラムで綴ってあるので、転写で gil šāh  
= 「地界の王」と訳せる。仮に、イデオグラムでなく、普通に gl š'h と綴られてい  
た場合、gar šāh = 「山岳の王」との区別が難しい。どちらにしてもガヨーマルト  
の称号である。

būd bowandag wirāstār ī gēhān abēzag ud

[u] anōsāg ud wahištāgān

kardār[īh] ī hamē winārišnīg dām padiš čimīg

xwānīhēd

Weh-Dēn āwurdārān ud aštāgān 《frētagān》 ud

[pām] paygāmbarān<sup>(203)</sup>

+āwišt ud ān kē pas az ōy gēhān abē-niyāz

bawēd az

frēstīd<an> ī dēn pad paygāmbar awiš . . ud

kēšdārān kē andar

ālūdāgdom ī zamān kunišn p<ū>dāgdom ī āwām

ristag wattar ī

hām kišwar +am-+nabānazdištomīh<sup>(204)</sup> ī mardōm pad

dēn gumāndom ī

pad +yazad +astīh ud mēnōg xīr ud niyāzōmanddom

---

203 ゴロアスター教に於けるパフラヴィー語の預言者職の名称としては、ここに挙げた Weh Dēn āwurdag = 「善教の将来者」、aštāg(frēstag) = 「(神から)送られた者」、paygāmbar = 「(神の)メッセージを運ぶ者」以外にも、waxšwar = 「(神の)言葉の守護者」がある。しかし、これらの言葉が、アヴェスター語の段階で教祖を指す言葉、zaotar = 「神官」、manθrān = 「マンスラ執行者」とどう繋がるのかははっきりしないし、パフラヴィー語の単語相互の意味内容の差も明確ではない。宗教研究上は、イスラームにおける nabī = 「使徒」、rasūl = 「預言者」、walī = 「神の友」などのように使い分けがあるのかどうか、機能の区別が重要になる。今後の研究課題である。青木健、「ゴロアスター教における聖典の概念」、『宗教研究』、第76巻第3輯、2002年、pp. 33-35参照。

204 テキストには、nw'zštktwš とある。Menasce[1973: 50]は、nabānazdištomīh と転写して、les plus proches と訳している。

ī gēhānīgān ō  
rasišn ī +am bē burdār ud gēhān rōšngar [ud]  
abardarīg [ud]  
āgāhīh nīst<sup>(205)</sup>-ēmēdīh ī gēhān az ān āgāhīh [ud] pad  
  
ān ī-šān paygāambarān āwišt 《ān ī-š pad paygām-  
bar dārēnd》  
kēš ī-šān az<sup>(206)</sup> dād-čimīgīh ī paygāambarān  
+āyēnd<sup>(207)</sup>  
ud +hammōzēnd padiš bē<sup>(208)</sup> [ud] az nigerišn hišt  
gēhān  
a-bōzišnīgīh andar dāmān abar guft bawēd ∴ (止)

(36) abar pahnēz ī +māzdēsnañ az dēwēsnañ<sup>(209)</sup>  
anēr  
+ud +frēftār ahlomōγ xēm az nigēr ī Weh-Dēn

hād az dēn nigēz [ī] ān ī awēšān rēman-xēm andar  
ruwān-išān

---

205 Menasce[1973: 50]は nēst とよむが、niyāzōmanddom というように完全否定を避けているので、nīst は nidom の別形とみたい。

206 次の bē と呼応している。

207 Fazilat[2002: 140]は、ŠDRTWN-šn と翻字して、frēstišn と転写しているが、テキストを見ると、ほぼ確実に無理。

208 直前の az と対応している。

209 mazda-yasna に対応して、dēw-yasna のパフラヴィー語化した形。

第29ページ翻訳

---

デーンの受入者は、人類の始祖・最初の地界の王たる  
ガヨーマルト<sup>(210)</sup>  
であった。デーネが世を治め  
て陶冶するようにすることによって  
デーネの進展があった。創造主からの最後のデーネの  
将来者は 最後の人間  
の首長にして王たるソーシャーンズであり、その彼は  
創造主の御意と  
威力によって、デーネの最後を奉ずるように、ガヨーマルト  
の行動と共に  
あったものを完全に仕上げ、世を無垢にして  
不死かつ最勝界的に  
なし、それによって創造物を永遠に陶冶する。宜なる哉  
彼は呼ばれて曰く  
ウェフ・デーネの将来者たちや使徒たち《被送者たち》および  
預言者たちの  
<sup>とうび</sup>掉尾を飾る者にして、彼よりのちには 預言者として世に  
(awiš) デーネを 送ることを  
世は必要としなくなる、と。そして  
最も汚  
れた時代に、その時代の最も汚れた行為、  
全洲中

---

210 注111参照。(『東洋文化研究所紀要』第147所載)



ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーンカルド』第3巻訳注・その3  
での極悪の習慣，人間が暗黒との最近親者であること，神の

存在とメーノグ的事物

についてデーンに最大の懐疑をもつこと，そしてまた暗黒の除

去者にして世を明るくする者の

到来に世の人々は窮乏している というが

最高の

明かしだとすること，この明かしからして，彼等（世人）が

預言者たちの掉尾を

なすもの《彼等が彼を（最後の）預言者としているもの》について望みの

極少なることを説くドグマ

者たち—その彼等は預言者たちが

来

てそれについて教えている律法の重要性を抜きにして顧慮から世

を放棄した（世を顧慮しなかった）ことになり

諸創造物には救いのないことを，（神に）ついて語ったことになる。

（36）マズダー祭儀教徒たちによる，デーウ祭儀者たち，

非エーラーン族

や虚偽者や異教徒（ども）の稟性からの防衛について。ウェフ・

デーンの示教から。

さて，デーンの示教によると，彼等稟性の汚れたものどもは

彼等の魂においてである。

第30ページ転写

zīndag [ud] tan abāg tan murd tan abāg ruwān

ō dušox

kunihēd ēd rāy māzdēšnān bīm ī az abar-ras-

išnih ī pad

paywēhk<sup>(211)</sup> ī az-išān ān rēmanih +ud +wist-xēmih

ī aziž az<sup>(212)</sup> ān ī

awēšān hamih<sup>(213)</sup> zīndag [ud] tan wēštar-iz pahrēzišn

+ka +kū<sup>(214)</sup>

murd tan kē-šān pūdag +nasā ʾ ud ēn-iz paydāg

kū az

ān ī awēšān hambrādagih<sup>(215)</sup> <ud> nazdikih ī paywand

damišn-iz kāhišn ī

ahlāyih ud ālūdagih <i> xēm winastagih ī xōg

nirfsišn ī

---

211 テキストには、ptwšk とある。Baily は、patvišak(\* pay-wišag)と考えた。Menasce[1973: 51]も、ベイリーに従って、patvišak と転写して、l'irruption と訳している。Fazilat[2002: 143-144]は、padwēšag と転写して、pūshidegī, kharāb, fasād と訳している。しかし、伊藤氏は、表記のように転写して、「伝染」と訳している。氏によると、これは、√vaēz-「突きさす」に由来する単語で、\*pati-vaēz-ka-のパフラヴィー語形である。パルティア語形なら、pahiwēšk になるという。(この注釈は、前半が青木、後半は伊藤氏のノートによる。)

212 az は、zīndag tan にかかる。

213 二重主語ととった。

214 テキストには、ka kū とあるが、修正。kū を「～よりも」の az の意味で使用していると見て、「～の場合よりも」と取った。

215 テキストには、hmahkyh とある。途中をイデオグラムと見て、ham-brasdagih とした。Fazilat[2002: 143-145]も同じ。Menasce[1973: 52]は、hamhākīh と転写して、société と訳している。

xwarrah u-šān +hamtaštih<sup>(216)</sup> ud hampahixwarīh  
an-āštih ud xīndag-  
ih ī paywēhk<sup>(217)</sup> hēnd pas ardīh-iz bawēd ud pad  
čār az  
ān ī awēšān damišn-iz ē dūr pahrēzišn abāg  
ēn-iz kū  
tašt ud pahixwar ī awēšān padiš gīrēnd 3 bār  
pad  
ān ī garm āb +šāyišn māzdēsna +az padiš xwar-  
dan xwārdan  
ī pahrēzišn ∴ (止)

(37) abar [hu]xwadāy[ih] ī meh, ān ī +hāwand

ān ī keh

az bowandag<sup>(218)</sup> az nigēz ī Weh Dēn

---

216 テキストには、MN tštyh とある。Menasce[1973: 51]は、hamtaštih と転写して、en commun coupes と訳している。az taštih と転写する可能性もあり得るが、後続の hampahixwarīh とパラレルと見れば、前者に理がある。

217 注211参照。

218 この語の解釈が、本章の文意を左右する。テキストには、bndk とある。そのまま転写すれば bandag で、「下僕」の意味になる。この場合、文意は「下僕よりも大きい王者、下僕と同等の王者、下僕よりも小さい王者について」になる。Fazilat[2002: 146, 161]は、この解釈を取っている。しかし、これだと、王者と下僕を同等に比較していることになり、かなり不自然である。これに対して、パフラヴィー文字では w と n が同型なので、bndk を bwndk の scriptio defectiva と見れば、bwndk=bowandag=「完全な」となり、文意はよほど明瞭になる。Menasce[1973: 51]は、転写は示していないものの、parfait と訳しているので、この解釈を取ったと考えられる。本稿でも、これに従った。

hād xwadāg ī meh <az> bowandag<sup>(219)</sup> [ud] ān ī [keh] kē  
xwad māda-  
yān pad xwadīh bowandag<sup>(220)</sup> mādagwarīhā pad ān ī ōy  
rāy ud xwarrah  
ud xrad <ud> hunar winirdīgīh<ā> čiyōn xwad rāyēnīd  
abzārīh ud  
ān ī hāwand <ī> bowandag<sup>(221)</sup> ōy kē winārēd bowandag<sup>(222)</sup>  
winārdag-iz hāwandihā  
aziš čiyōn xwad [ī] rāyēnīd[an] abzārīh ud rāyē-  
nīd-iz aziš ∴  
ud ān ī keh az bowandag<sup>(223)</sup> ān kē-š mādayānīhā  
winārišn pad ān ī  
bowandag<sup>(224)</sup> xrad <ud> hunar čiyōn xwad ī-š winar-  
išnīg ēwāzīg [ud]  
pad abzār ∴ (止)

第30ページ翻訳

---

生きている肉体は肉体とともに，死んだ肉体は魂とともに  
悪界往きに

---

219 注218参照。

220 注218参照。

221 注218参照。

222 注218参照。

223 注218参照。

224 注218参照。

ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーンカルド』第3巻訳注・その3  
される。この故にマズダー祭儀者たちは その汚れとそれか  
ら由来する最低の稟性とが  
彼等からの伝染 (paywēhk) によって 来襲すること  
を恐れているのである。彼等  
との接触は、生きている肉体のほうから (az), 彼等の汚れた  
死屍 (のみ) である、死んだ  
肉体が存する時よりも、より多く身を防禦すべきである。また  
こういうことも明かされている、曰く : 彼等  
血縁を共にしているか近接しているもの (汚れ人) どもの  
吐息からでも天則の  
減衰や稟性の汚染化 性格の破綻,  
ファルナフの  
弱化が生じ、彼等と碗を共にしたり食器を共にしたりすることから  
不和と伝染  
病が生じ ついには争いまで起こる。そしてできる  
だけ  
彼等の吐息からも はなれて防禦すべきであるし、それと共に  
こういうこともある:  
彼等がその (食事の) ために手をとる碗や食器は3度  
熱湯  
で洗うべきで、マズダー祭儀教者はこれを用いて食べ  
たり 飲んだりすることからは  
身を防禦すべきである。

(37) (完全より) より大きい王者, (完全と) 同等なるそれ,  
完全よりも

より小さい それについて。ウェフ・デーンの示教から。

さて、完全よりもより大きい君主とは

自身が首

領であり、自性において完全な首領であり、己が

財とファルナフ

と知慧と美德(才幹)において統御されている(定立している)こと、例えば自ら

能力を統御しているものの如きである。また

完全と同等なるそれとは(能力を)完全に統御するも

それと同等にそれ(能力)によって統御され

もすること、例えば自身が能力を制御していて また それ

(能力)によって制御されてもいるものの如きである。

また完全よりもより小なるそれとは首領然として それ(己れ)の

統制が己が

完全な知慧と美德(才幹)による(のみである)こと、例えば自身、

己れの能力によって統制されるだけにもの

ごとくである。

第31ページ転写

---

(38) abar šādīh ī šādīh ud bēš-iz bēš

ud šādīh bēš-iz ud bēš šādīh

čim <az> nigēz ī Weh-Dēn

hād šādīh ī šādīh ōstīgān šādīh bēš-iz

bēš [ī] šādīh ī ān ī tēz sazišnīg gētīg šādīh pad

sazišn bēš bēš ī pad sazišn šādīh paywand 𐬀𐬀 (止)

(39) abar pand <ī> mardōm padīš bōxtagīh ud ān

ī aziš

ērangīh az nigēz ī Weh-Dēn

hād pand ī mardōm ī pad gīrišnīh padīš bōxtagīh

āhang<sup>(225)</sup> ī ō Ohrmazd kām andar abāyišn ud pursišn

ī Weh

Dēn ī ān ī Ohrmazd kām ayāb andar Weh Dēn +kē

āgāhān

ī padīš kunišnīg <ud> pahrēzišnīg tis ān ī anāgīh

az kunišn

ud [pah] pahrēzišn ud ka-iz-iš pad Ohrmazd

kāmagīh čiyōn ka

xwēš axw āfrah ud xrad [ud] dastwar hēh ka abar-

pād ī ō ān rasišn ī āgāhīh čār 《abar pādan ān ī

aziš<č>ārīh》 pad a-warangīh<sup>(226)</sup> ud pad-iz hunsand

---

225 テキストには、h'wnd とある。Menasce[1973: 52]は、āhang と転写して、rattachement と訳している。本稿でも、これに従った。別解として、Fazilat[2002:149]のように、hāwand と転写して、hamānā hamterāz shodan と訳す可能性もある。

226 テキストには、'bwlngyh とある。Menasce[1973: 53], Fazilat[2002: 149]共に

ardīg<sup>(227)</sup> uzīd<sup>(228)</sup> warangih<sup>(229)</sup>

dastwar waran axw xwad[ag] dōšagīg tis ˙˙ (止)

(40) abar ast artih ī paydāg ud paydāgih az

nigēz ī Weh-Dēn

[abar ast] hād ast xwad astih ān ī paydāg

paydāgih xwad ō dānāgih nēnōg xwad pēš-iz az

kār

ōh-iz ō xwad Spenāg Mēnōg paydāg būd hamē xwad

第31ページ翻訳

(38) 喜中の喜と苦中の苦

読めていない。本稿では、欲望の悪魔 waran から、a-warangih と転写して、「無欲」ととった。hunsand = 「満足」と対になる語が入る箇所なので、この訳語にはかなりの正当性がある。

227 テキストには、'ltyk とある。Fazilat[2002: 149]は、xradīg = 「賢い」ととっている。この場合、文章をここで切って、bā khwod khorsandī va kheradvarī の訳文になる。本稿では、直前の hunsand で文章を切り、ここを ardīg = 「争い」と取って、次の一文の主語とした。

228 テキストには、'wzyt とある。Menasce[1973: 52]は、bōcihit と転写して、il se sauverait と訳している。Fazilat[2002: 149]も、a-bōzīdan としている。しかし、ardīg から文章が始まると見れば、uzīd と転写して、「(争いは)消滅する」と訳せる。

229 注226参照。



また喜びが苦となり また苦が喜びとなる

理由について。ウェフ・デーンの示教から。

さて、喜中の喜は確乎たる（永遠の）喜び（のこと）である。苦中の苦も（同様である）。喜びといっても速やかに推移するゲーティーグ的喜びなるものは 推移によって苦と（結びつき）、（同様にして）苦も推移によって喜びと結びつくのである。

(39) 人がそれによって救われる道と それのために

罪あるものとなるそれについて。ウェフ・デーンの示教から。

さて、受け入れることにより、それによって人間の救われる道は

Ohrmazd の御意たる ウェフ・デーン の要請や（それに）尋ねる

ことをし乍ら、或いはウェフ・デーン（そのもの）において、それに拠

って為すべきか避けるべき事物 — それは為したり避けたりすることから不詳が生じるころのもの — を知っている人々（āgāhān）を Ohrmazd の御意に引き入れることである。そして、たとい人にして Ohrmazd の御意と共にあることを、宛も

自分の意<sup>(230)</sup>が教えてくれ、そして（自分の）知慧が指南者である時の如く  
であろうとも、上で（上から）  
守られているときに、知識（認識）が到来するように手段  
が生じ《上で守るということは  
そこから手段が生じるということ》、無欲（awarangih）の中で  
そしてまた、満足の中で争いは無くなるのである。（之に反して）  
欲が指南者、貧婪が意<sup>(231)</sup>であるのは利己的なことである。

(40)<sup>(232)</sup> 顕在者（あらわなる存在者）の存在と顕現に  
ついて。ウェフ・  
デーンの示教から。

さて、自存するものの存在とは、顕在するものが  
（認知力の）発動以前にその認知力に対する自己顕現  
であり、  
それはまさに、スペナーグ・メーノーグが自身に対して顕現して  
いたということが（その）恒常的自

---

### 第32ページ転写

---

230 Menasce[1973: 52]は、axwを訳さずにそのままahuとしているが、このままでは意味不明である。Fazilat[2002: 149]は、āhangと修正しているので、当然、別の訳語になる。本稿では、存在ではなく生気の意味で取った。

231 注230参照。

232 本章は、ゾロアスター教神官がキリスト教の三位一体論に反駁した箇所として有名である。伊藤氏自身の研究にも引用されているので、詳細な注釈については伊藤[2001: 452-454]参照。

astih ˙˙ paydāgih ān ī ast pad astih ō-iz bē

mard xwad pasihā čiyōn paydāgih ī Ohrmazd pad

[ud] astih ō Wahman pas az āfrīd ī-š Wahman pad

kunišn

būd abāg ō āfrīdārīh ī Wahman pad dādār fradom

dahišnīh

ud abāg dahišn dānāgih dēn +hammōxtagih ud

abdih ī-š xwadih

ud passazagih ī Wahman pad dādār pusih ud dādār

pad Wahman

+pidih ī dēn nigēz ēg-iz ān ī ō xwad dādār pēš-iz

az Wahman dahišn paydāg būd ō Wahman āgāhīh

and mad ēstēd čand dādār padiš dānāgēnid

ōh-iz dahišn

ayābišn tuwān pāyag and čand dādār az xwēš

wisp āgāhīh

ud wisp tuwānih ud wisp xwadāyih bahrēnid[an]

nē-iz <ō> ān ī +abardomih pad

dānišn <ud> tuwān ō ān +abardarīh pad dānišn

<ud> tuwān [ō ān

abardomih] ayābišn bawēd ˙˙

ud<sup>(233)</sup> +abar kēšdārān kē dādār xwad ēw<ā>z

pad pid pus pīd nē pēš az pus pus

nē pēš az pid ud har 2 bunistāg ud

hamēyīg

kēš

abāg būd nē šāyistan waxr ī ēk xwad ka

xwad ēk āfrāyēd waxr-iz gīrēnd pad 2 pēš

[ud] 2

pēš ud 2 pas ēk az did abar pid pus guftan

ān ī <2>

apēših ud 2 pasih ēk az did pad pidarīh ud

pusarīh bawēd ī andar tōhmag ī +tis +rōn

[ud] nē abar pid ī

第32ページ翻訳

---

在であるということである。顕現は存在者が存在をもって

人間

---

233 これより以下の部分については、Madan 版では独立の章のように扱っているし、内容的にも独立の章とみられうる。しかし、伝統的にはこれを独立の章とはしていないので、今はその伝統に従っておく。

ゾロアスター教書籍バフラヴィー語文献『デーンカルド』第3巻訳注・その3  
以外のものに対しても（その存在者）自身よりも後発的であることは、例えば  
その存在をもってする Ohrmazd の  
Wahman への顕現が その活動をもって 彼による Wahman の  
創出よりも後なるが如くである。  
創造主によるワフマンの創出とともに 最初の  
創造があったし  
また 創造物の知識（認知作用）とともに デーンと  
それ（デーン）の自性の不可思議との学習が  
および 創造主に対するワフマンの子たる自分やワフマンに  
対する創造主の父たる自分  
の格付けがあったとはデーンの示教であるが、その時でも（ēg-iz）  
ワフマン創造よりも前に 創造主自身に  
わかっていたことで、ワフマンが理解するようにと（ワフ  
マンの許に）  
到来しているものは、創造主がそれで以て（ワフマンを）知者にする  
だけのもの（にすぎなかったの）であった、それはまさに創造  
物が獲得できる段階は、創造主がご自身の  
全知  
と全能と統治から頒ち与え給うことは  
知と能力において  
最高なるものではなくて 知と能力において 比較的  
高いものに  
獲得できるだけのもの（and čand）だ、とこういうことである<sup>(234)</sup>。

---

234 ゾロアスター教がインド・イラン共通時代から継承した諸神格の存在をどう理  
論化するかについては、文献によって様々な立場があって、一定した教義は確立し

ていない。例えば、代表的な言説として『イラン版ブンダヒシュン』には以下のようにある。「まず第1に、彼（オフルマズド）はワフマンを創り、これからオフルマズドの創造物が展開した。これに対して、ガンナーグ・メーノグは、第1にミドーフトを、次にアコーマンを創り出した。」(TD1: 13) 概して言えば、サーサーン王朝時代のゾロアスター教神学では、オフルマズドとアフリマンが、お互いの対抗上、次々に善悪の天使群を創出し、それらを指揮して宇宙的規模の闘争を展開していったという神話的教義が主流になっている。

これに対して、本章前半の言説は、上位者の認識作用によってワフマンの存在が顕現すると唱えており、ゾロアスター教の創造神話に新プラトン主義の流出論を導入して哲学的教義を形成している。また、『デーンカルド』第4巻の冒頭にも、オフルマズドからの各天使の段階的流出を説いた類似の言説がある。(フランス語訳として、Menasce[1958: 24], Molé[1963: 325], 日本語訳として、青木健, 「中世ゾロアスター教の後継者—シーラーズ系ゾロアスター教徒の興亡—」, 『オリエント』, 44-1, 2001年, pp. 46-47参照。) スフラワルディー(d. 1191)の東方神智学—因みに、ここでも、光の光から流出する最初の天使=第1知性は、バフマンである—を待つまでもなく、サーサーン王朝時代のゾロアスター教神官たちが、ゾロアスター教の天使論をネオ・プラトニズムで理論化する新しい試みに着手していた証拠である。

サーサーン王朝時代のゾロアスター教へのギリシア哲学の影響については、ユスティニアヌス帝がアカデメイアを閉鎖したのに伴い、ビザンティン帝国からクテシフォンに亡命してきたギリシア人哲学者たちの事跡が知られている。例えば、Paulus the Persian はアリストテレス哲学の要約版をシリア語で執筆してホスロー1世に献呈したし(A. Christensen, *L'Iran sous les Sassanides*, Copenhagen, 1944, p. 427参照), Priscian the Lydian は『靈魂論』の要約を作成し、これはラテン語版で現存している(I. Bywater (ed.), *Supplementum Aristotelicum*, Vol. 1, Part 2, 1885参照)。その他、アリストテレスの『自然学』から取ったと考えられる断片が、パフラヴィー語文献の随所に散見される(H. W. Bailey, *Zoroastrian Problems in the Ninth Century Books*, Oxford, 1971, pp. 80-119)。Jacques Duchesne-Guillemain, *La religion de l'Iran ancien*, Paris, 1962, pp. 289-290参照。

このように、ギリシア哲学の導入に関する先行研究といってもペリパトス学派の影響に関するものが主流であり、新プラトン主義の影響については殆ど研究がなされていない。サーサーン王朝時代のゾロアスター教の天使論と新プラトン主義の流出論の関係の詳細は、今後の研究課題である。東方神智学におけるゾロアスター教

また、創造主は 父・子として

唯一者であり、父は子より先ならず、子も

父より先ならずして 両者は共に根源者にして

永遠なるものと

説く ドグマ者たちについていえば

共存したということは許されない。一つの歪曲は それが

(唯) 一者自身を説くこと自体であり、(もう一つの) 歪曲は 2 先行

者を立てて 2 者は

互いに先行し また 2 者は互いに後出すると彼等が解していること

である。(彼等が) 父・子を語ることにについていえば、父たる身分と子たる身分において両者は互いに先ならず、また互いに

後ならずということは、事物の系譜(系脈)の方向においては、

本性上 子より前なる父

---

### 第33ページ転写

---

[pad] pad čihr pēš az pus ud pus aziš ˙:

ud pus ī pad

---

天使論の位置づけも、スフラワルディーのオリジナリティーの問題と併せて再検討しなくてはならない。(Shihaboddin Yahya Sohravardi, *Œvres philosophiques et mystiques*, Tome 2, Teheran/Paris, 1977, pp. 40-41参照)

čihr pas pid ud az pid ∴ (止)

(41) abar dāšnīh <ī> dādārān xwēš dāšn[īh]

+padiriftārān

andar +abē-bīmīh ī pad abāz appurdan ī

dādār ān dāšn [ī] az nigēz ī

Weh-Dēn

hād sazāg dāšnīh ī dādārān xwēš dāšnīh [ī]

padiriftārān pad xwēšīh dāšnīh ī dādārān <ī>

ān dāšn

dahēnd [ud] arzānīgīh ī padiriftārān pad arzānī-

gīh ī

padiniftārān pad ān ī dāšn 《ō xwēšnīh arzānīg

padirift-

ārān madan ī ān dāšn》 ī ham kū dādār ān ī-š

xwēš

pad mēnišn ō ōy dāšn arzānīg rādēnēd ud

+abē-bīmīh ī

padiriftān pad abāz nē appurdan ī dādār ōh-iz ī



ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『アーンカルド』第3巻訳注・その3

pādxšāy dāšn aziš ka nē pad wināh-gārān

ačār

xwēših pad abēgumānih ī abar ostigānih <ī> ōy dādār

pad

dādār pad dānāgih rādih ud dādest<ān>ih ud kēšdārān kē

dādār ān ī-š dād az-iz wināh-gārān nē appārīhišn

andar +abē-wihānag pādi<x>šāy abāz appurdan kēš

ī-šān az

dād dānāgih rādih ud dādestānīgih-iz +aziš bē

+penih <ud>

adādestān-iz abar guft bawēd ʾ: (止)<sup>(235)</sup>

### 第33ページ翻訳

---

にもなく、彼（父）からの所出たる子にもないことであり、

また本性上 父の後であり、かつ

父から所出たる子にもないことである。

(41) 施主たち<sup>(236)</sup> による施物の施与（ならびに）

---

235 Madan 版第33ページの第21行目まで。

236 普通、パフラヴィー語では、Dādār は「創る者」の意味で、創造主オフルマズドを指す。しかし、本章では、dādārān と複数形になっているので、「与える者」＝「施主」と解した。これに伴って、dāšnih も「施物」、padīriftār は「受け取り手」＝「祭儀を執行する神官」と、意味を確定できる。

その施物を施主が取り戻すことを畏れることなしに

受けとるものたちについて。ウェフ・デーンの

示教から。

さて、正しい施与とは 施主たちが自分のものを施与し

受者たちに、その施物を施与する施主たちの施与を己が  
ものにするに

あたって、その施物に対するその受者たちの相応性をもって

受者たちの相応性があること《その施物は（それを）己がものとするのに  
相応する受者たち

に来るといふこと》である。これは即ち (i ham), 創造主 (施主)<sup>(237)</sup>  
が己がものを

心慮をもって、その施物に相応する者に恵与し給い、そして受者  
は

創造主 (施主) が取り戻し給わぬことに無畏だということである。この  
ことはまさに、(人は)

造罪者どもとしてでない限り、彼 (創造主) からの施物が

---

237 ここでは dādār が単数形で現れているので、「創造主」、「施主」の両方の訳語が可能。多分、創造の際の創造物と、祭儀の際の施物とを、掛けて解説していると考えられる。

ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーンカルド』第3巻訳注・その3

許され、知と

寛裕（恵与）と合法とにおいて、創造主（施主）としての この創造主

の確実性に疑いをもたずに

必然的に己がものにする、とこういうことである<sup>(238)</sup>。ところが

創造主は自分から与えたものを造罪者どもからも奪うことは

しない（といいながら）

原因（理由）もないのに取り戻すことができると説くドグマ者たち

その彼等は律法に対する

認知から、寛裕および合法から出ておりながら（az...iz），（それを）彼

から抜きにして吝<sup>りんしよく</sup>と

不法を（創造主）の上に語ったことになる。

---

238 ここまでは、祭儀の際の施主の施物が、創造の際のオフルマズドの存在付与に準えて説かれ、一旦与えたものを理由もなく取り戻すことはない、と説明している。モーベド神官やダードワル神官のようにサーサーン王朝の行政・司法の官職に就かず、一般信徒からの祭儀料で生活しているハーウィシュト神官にとっては、死活問題を述べた章である。しかし、サーサーン王朝滅亡後に、国家権力の保護を失っても生き残ったのは、高位のモーベド神官やダードワル神官ではなく、一般信徒と密着した下級のハーウィシュト神官だった。この為、現代まで生き延びたゾロアスター教神官には、この祭司としての性格が前面に出ている。なお、サーサーン王朝時代のゾロアスター教における寄進としては、拝火神殿ごと建立して日々の維持費を支出する大規模なもの（カアベ・イエ・ザルドシュトのシャープフル1世碑文が初出）から、1回毎の祭儀に支払う小規模のものまである。これらについては、J.-P. de Menasce, *Feux et fondations pieuses dans le droit Sassanide*, Paris, 1964参照。